

\*チャペル・メッセージ：昇天日にちなんで\*

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 16章33節&使徒言行録1章1~14節  
(今日は二か所読みます)

★今週の賛美歌：338番 [https://www.youtube.com/watch?v=maH0fhrT0\\_g](https://www.youtube.com/watch?v=maH0fhrT0_g)  
(楽曲と録音に関しては文末の解説を参照。)

★今週の前奏曲(是非、メッセージの前に聴いてください。詳細は文末解説で。)  
オリヴィエ・メシアン作曲

「L'Ascension : Quatre Méditations symphoniques キリストの昇天：四つの交響的瞑想」より第3楽章

[https://www.youtube.com/watch?v=JS37bQ-SN\\_4](https://www.youtube.com/watch?v=JS37bQ-SN_4)

★「またおいでになる」

「新しい生活様式」という言葉を頻りに耳にするようになりました。内閣府発信の「新語」のようです。そしてどうやら、コロナウイルス感染拡大を予防するために必要な対策を様々に講じる「生活様式」のことを言っているよう

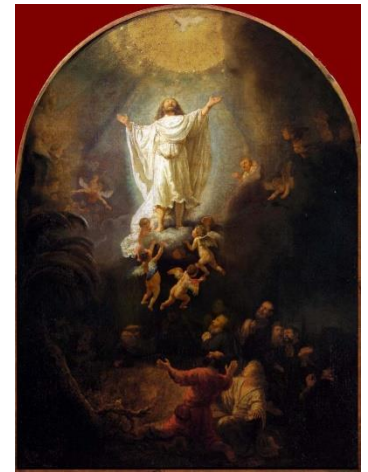
です。人との適切な距離をとる、マスク・手洗い・消毒の徹底に始まり、社交も仕事も勉学も、私たちの生活のあらゆることを「感染防止」を最優先で判断し、実施しなければならない、今のこの状態のことを指しているのです。しかし、「新しい」などと言われると、なにやらとってもいいことのように聞こえませんか？でも騙されてはいけません。「非常事態宣言」は解除されても、今の「コロナ感染防止が至上命令」の私たちの生活は、やはり「フツウではない」という感覚を、麻痺させてはならないと思うのです。

私たちは今、私たちの人生のなかでは経験したことのない、危機の時代を生きています。多くの人が、自分と大切な人たちの命がかかったことだから、プライバシーをはじめ、日本国憲法が保障している基本的人権（それらは「人には自然と与えられた権利」とされているものなのですが）すら、「仕方がない」といって手放すことも厭いません。この状態は確かに、今までにない「新しい」状況ですが、しかしそれが「日常」だ、というのはどこか違う気がしませんか？

いつか、この究極の選択を迫られる日々は終わらせなければならぬでしょう？毎日の些細な判断が全て「命と引き換え」の日々は、文化的で平和で幸福な日々だとは言えませんよね？そしてこの異常を前提に受け容れた様々な制限も「イイこと」ばかりではないでしょう？そうであれば、私たちは、この「新しい」と言われる生活の圧迫を、「圧迫」として、違和感を持ち続けることが大切でしょう。もちろん様々な不自由から来るストレスに押し潰されないような工夫は必要です。でも「違和感」のない日常を必ず回復する、という希望を持ち続けるためには、無理をし、我慢をしている部分の痛みを忘れてはならないと思うのです。ハイヒールを履いて一日仕事をするののように、「痛いのがフツウ」は、絶望を受け容れることだと思うからです。

「無理をし、我慢をし、違和感を感じる部分の痛みを忘れない」ということについて、今日、皆さんと読む聖書の箇所は、一つの視点を私たちに与えてくれるように思います。

今日、読んだ箇所は2つあります。今年、継続して読んでいくことになっているヨハネによる福音書からと、もう一つ「使徒言行録」という物語から読みました。ヨハネ福音書の箇所は、先の日曜の教会の礼拝のために指定されていた箇所から一か所取り上げました。16章全体を読んで見てくださいれば、この箇所が、イエスが十字架で死ぬ前夜の、弟子たちとの最後の対話であることがわかるでしょう。ここでイエスは、「自分は今、皆と別れて独りで行かねばならない。だが、それは結局あなたたちのためだ。だが、あなたたちは、私が去ると散り散りになる。そして恐怖や不安を感じるだろう。だが、心配するな、私はあなたたちを孤独なまま



\*今週のアート  
Rembrandt Harmensz. van Rijn  
(1606-1669: レンブラント) 作  
“Passion series: Ascension” (「受難のキリスト」連作から、「昇天」)  
油絵 (93 × 69 cm)、1636年

<https://www.artbible.info/art/large/7609.html>

にはしない。だから、恐れったり不安にならなくていい。忘れるな、なぜなら、たとえあなたたちは弱くても、【私は既に世に勝っている】のだから」という、別れのスピーチのクライマックスです。

イエスの復活の後なのに、どうしてこんな十字架の死の前の物語に逆戻りするかと思うでしょう。でも今だからこそ、弟子たちと一緒に、十字架の直前のことを思い出さねばならないのです。十字架の直前に、「あなたたちを孤独にしない。なぜなら、私は既に【勝利している】から」と、こんなにはっきり教えてもらったのに、弟子たちは、このことはすっかり忘れて不安になり、恐怖を感じ、「緊急事態宣言」下でエルサレムの宿の扉に鍵をかけ閉じ籠っていました。また復活のイエスに出会ったのに、やはり怖くて故郷のガリラヤに逃げ戻って、「元の生活」のなかに埋没しようとしていました。でも、イエスの死の直後の緊張や恐怖は、弟子たちにとっては「異常」な事態でした。そして、その異常を抜け出すために逃げ帰ったガリラヤでの、イエスのいない「元の生活」もまた、イエスに出会ってしまった後では、最早や平和で幸せなものではなかったのです。どこもかしこも違和感だらけ。だから弟子たちは、楽に生きるために、この違和感を「フツウの日常」にしようとして努力します。まるで鎮痛剤を沢山飲んで痛みを麻痺させるように（「漁に出よう」！）。

こうした弟子たちにとって、復活のイエスの介入は、一見「異常」に見えて、じつは、「鎮痛剤がなくても痛くない生活が、本当の幸福で平和な日々」という感覚を取り戻させる事柄だったと考えてみるのはどうでしょう。弟子たちを苛んでいた「イエスの死」は、復活のイエスによって根本から解決され、弟子たちは痛みから解放されました。そこで、復活のイエスはもう一度、十字架の直前に弟子たちに言っておいたこと＝【恐れるな、私は既に世に勝っている】に弟子たちを引き戻します。それはつまりどういうこと？弟子たちを解放した復活の出来事は、まだ「めでたしめでたし」の物語の結末では、ない！ということなのです。

そこで使徒言行録の物語が私たちに必要です。復活のイエスに出会い、平和と幸福を取り戻した弟子たちは、それからどうなったのでしょうか？そして、復活のイエスは、復活してそれからどうなったのでしょうか？使徒言行録は、イエスは、復活から40日、弟子たちと共にいて力づけ教え導いた後、「天に昇った」と記します。ヨハネ福音書風に言うと「父（神）の元へと昇った（帰った）」ということです。どうやって？弟子たちの見ている目の前で、栄光の雲に包まれて。弟子たちはただ口をポカンと開けて天を見上げるしかありませんでした。

え？またいなくなったの？いえ、「今、いなくなるのは、また来るため」ってヨハネ福音書の16章で、イエスは言ってませんでしたか？十字架の時も、復活して「また来て」くださったでしょ？だから、今度も信じられますよね？そう、「また来る」。そして「今度はずっと一緒にいる」！なぜなら「私は既に世に勝っているから」。あらゆるものに限界があり、私たちが我慢したり、圧迫されたり、痛みを痛みとも思わなくなるほどに傷つけられ束縛されることが「フツウ」になっているこの「世」に、復活のイエスは既に「勝利」しているから、この「世」の限界を超えて、私たちには分からないし、できもしない、真実に「新しい」方法で、約束を叶えてくださる。復活のときのように、今度も。どうやってか分からないけれど、今は。ただ、今、ここに刺さって痛みを感じさせる「違和感」が取り去られる、という希望は確かなものだ、弟子たちは、今度は信じたでしょう。だから、彼等は待つことができたのです。「また来る、そして今度はずっと一緒に」という約束を。

この木曜日、私たちは使徒言行録が記す、復活のキリストの「昇天」を記念します。「また来る、そして今度はずっと一緒に」の約束を実現するために天に昇るキリストを信じた弟子たちの抱いた希望と、今、私たちが必要としている希望は、きっと同じだと、思いませんか？

【祈り】「また来る、そして今度はずっと一緒に」と言ってくださったその約束を信じることができますように。私たちが感じる良心の痛み、平和と幸福を願う故の苦しみを、麻痺させるのではなく、あなたの約束への希望の源としてください。アーメン。

\* Youtube 録画で聴く「今週の賛美歌」について

Up Through Endless Ranks of Angels （作曲：Henry V. Gerike, 編曲：Michael Burkhardt）

MorningStar Music Item Number 50-5049

「Jaroslav Vajda の賛美歌歌詞に付された Michael Burkhardt 作曲の ASCENDED TRIUMPH を金管カル

テットと聖歌隊のために Michael Burkhardt が編曲したこの作品は、キリストの昇天を記念する祝祭的な合唱曲として優れたものである。会衆も一部参加することは可能であるし、金管楽器の部分もオプション利用が可能。オルガン伴奏だけでも合唱を生き生きと美しく聞かせるだけの作品に仕上がっている。

録音はミネソタ州ミネアポリス市において、Matthew Culloton の指揮の下に The Singers の演奏で行われた。録音技術スタッフは David Trembley (Soundmaster Productions)。] (The MorningStar の Youtube サイトより)

\* 「今週の前奏曲」について

フランスの現代作曲家オリヴィエ・メシアンは、多くの教会のための音楽を作曲しているが、この作品は、「キリストの昇天：4つの交響的瞑想」と題されたもので、復活のキリストが、40日の時を弟子たちとすごしたのち、栄光の雲に包まれて天に昇った、という使徒言行録の記事に基づく祝祭（復活後40日目＝木曜日）のための作品。オルガン作品としては、全曲は約30分の演奏時間。

この作品は最初はオーケストラのための作品として創作され、1935年にパリで初演、間もなくパイプオルガンのために編曲される。この際、第3楽章はオーケストラ版とは全く違う新曲が作曲された。「本日の前奏曲」として聴いていただきたいのは、この第3楽章。Transports de joie d'une ame devant la gloire du Christ qui est la sienne（キリストご自身の栄光の前で、天にも昇る魂の歓喜）と題されたこの楽章は、楽曲全体の中で抜きんでて華やかで、神秘的で重厚な和声で昇天のキリストの栄光を感じさせ、クライマックスに折り重なって上昇するスケール（音階）と共に、「天に昇る」情景を思い起こさせる。

演奏は、メシアン作品のパフォーマンスでは最も定評のあるオルガニストの一人、Olivier Latry（1962年～）。演奏は2008年、Royal Albert Hall of Arts and Sciences（ロンドン）で行われたBBCプロムナードコンサートにおいてのもの。楽器（パイプオルガン）はHENRY WILLISによって1871年に建造、その後、1924年と1933年にHARRISON & HARRISON社、2004年にMANDER ORGANS社によって補修されている。大音響なので、ボリュームは調整してください。

この大オルガン自体に興味のある方は [https://www.youtube.com/watch?v=mmH5C\\_kGQmo](https://www.youtube.com/watch?v=mmH5C_kGQmo) に、英語ですが、オルガン解説のビデオがあります。